

# 令和三年度入学試験問題 国語（五十分）

二月二日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ツバキ文具店」を営みながら手紙の代筆を仕事としている鳩子のもとに、ある寒い午後、一人の男性が現れた。

男性は、湯飲み茶碗を両手で包んで自分の手を温めている。その口元から、かすかに銀色の息がこぼれた。

「書ける範囲で結構ですので、お願いできますか？」

男性の手が温まるのを見計らい、その前に紙とペンを置く。男性は、背筋を伸ばしたようなはっきりした筆跡の字で、自分の名前を記入した。

私は、目の前の白川清太郎さんにそっとたずねた。

「ご用件は？」

すると、清太郎さんが切羽詰まった表情で話し始めた。

「実はね、お袋を、楽にしてあげてほしいんですよ」

「お母様を？」

楽にしてあげる、とはどういう意味だろう。一瞬、物騒なことを考えそうになり、慌てて打ち消した。清太郎さんが、困ったように一度大きなため息をつく。それから、一気に話し始めた。

「お袋は気丈な性格でして、九十を過ぎるまでずっと誰の力にも頼らず、横浜でひとり暮らしをしていたんですけどね、施設に入ってから、妙なことを言うようになりました。話は前後しますが、私の親父は貿易商でしたが、もうとっくの昔に亡くなっています。なのに、その親父から手紙が届くはずだから、どうしても家に帰らせてくれつきかないんですよ。

親父は無愛想な男で、正直なところ私にはあまりいい思い出がありません。たまに家に帰ってきてきてもぶすつとして笑いもしないし、子どもの頃に一緒に遊んでもらった記憶も全くないんです。勇気を持って話しかけても無視されるし。昔かたぎの男そのものでして、お袋に対しても、何か贈り物をしたりだとか、優しく労ったりだとか、そういうことは一切していませんでした。かといって、酒を飲んで暴れたり、暴言を吐いたりするようなことも、なかったですけどね。

そんな親父だったものですから、お袋に手紙を書いていたなんて話、<sup>③</sup>にわかには信じられなくて。ずっと姉貴と、お袋のたわ言っていうか、妄想じゃなかったって片づけてたんですよ。

でも、先日姉貴がお袋の家を片づけに行ったら、箆筒の奥から、現物を見つけちゃいましたね。それが、これなんです」

清太郎さんはそこまで話すと、おもむろに膝の上に置いてある風呂敷包みに視線を落とした。

私は自分のマグカップに手を伸ばし、少し冷めた葛湯をすする。のほほんとした丸い味が、舌の上にはじわりと広がった。

清太郎さんが、丁寧に風呂敷を畳んでから、手紙の束を私に差し出す。手紙は、ひとまとめにして赤い紐でくくってある。葉書の方が多いいけれど、中には封書も混じっていた。

「どうぞ、どれでも広げてご覧ください」

清太郎さんがそう言ってくれたので、両手で手紙の束を持ち上げ、自分の方へと引き寄せた。

古い紙特有の、乾いた土ほこりのような匂いが近づいてくる。そっと紐をほどくと、手紙の束が優しくなだれ、机の上に扇のように広がった。

一番上にあるのは、モノクロ写真の絵葉書だった。巨大なプールで、古めかしい水着を着た人々が楽しそうに泳いでいる。

「拝読しても、よろしいですか？」

自分宛てに書かれたものではない手紙に目を通す時は、いつだってその手紙の差出人と受取人の両方に対して、心から申し訳ない気持ちになるものだ。それでも、清太郎さんが読んでくださいという目で私を強く見返したので、会釈をしてから手のひらの葉書を裏返した。

「あの仏頂面の親父に、こんな茶目つ気があったなんて、いまだに信じられんです」

私が文面を讀んでいると、その内容を一緒に覗き込みながら清太郎さんがつぶやく。もう、どの葉書にどんな内容が綴られているのか、すべて熟知しているらしい。

「これじゃあ、僕らの知ってる親父とは、まるっきり別人ですよ」

言葉では呆れたように突き放しているけれど、内心はやっぱり、うれしいのかもしれない。清太郎さんの目じりに、優しさが滲み出ている。

「私や姉貴にも、こういうのを一枚でも送ってくれたら、人生違ったかもしれないのにな」

そこには、清太郎さんのお母様に対する愛情が、臆面もなく綴られていた。きつと、奥さんのことが心配で心配で仕方がなかったのだろう。滞在地の先々から、奥さん宛てに手紙を書いていた。時には、一日のうちに二通立て続けに書かれたものである。「羨ましいですね」

しみじみと、手紙の文面を見つめたまま言った。ひとりでに、ため息がこぼれる。

「よく考えれば当たり前のことなのですが、親父とお袋も、男と女だったっていうだけの話なんですよね。子どもの立場からは、そんなこと全く考えもしなかったけど」

「お母様は、いつもお父様からのお手紙が来るのを、待っていらしたんですね」

私の放ったその言葉に、清太郎さんが目を閉じて深くうなずいている。

「そして、今もまだ、待っていらっしやるってことですよね」

私は、その言葉を噛みしめるような気持ちでつぶやいた。

「だから、家に帰らせてくれて。その姿を見ていると、切なくなっちゃうんですよ。幼い俺たちの目を盗んで、お袋、いつつも郵便受けを覗いていたんだらうなあ、なんて想像するとね。きつと、子どもたちには見せない、【⑥】の愛だったんでしょ」

途中から堪えるような声で一気に言うと、清太郎さんは目じりに溜まった涙をそっと拭った。そして、改めて姿勢を正し、私の方をまっすぐに見て言った。

「天国からの親父の手紙を、かわりに書いてもらえませんか？」

清太郎さんからのお願いに、今度は私が目じりの涙を拭う番だった。

手紙はなかなか書けなかったが、雨やどりの美術館の喫茶室で突然にアイディアがひらめき、鳩子は店員にもらった注文用紙の裏に、急いで手紙の文面を書きつけた。「天国からの手紙」はついに完成する。

あじろの千ちゃん  
ぼくは、うんとおもしろい色をいんこする。  
そこからは、千ちゃんのことか、あーくいんこする。  
もう、ぼくはタマノリ、生を卒業しよう。あれ。  
だから、えいどいんこするときは、まいどいんこする。  
好きだから、散策しませんか。  
エカオの千ちゃんか、好きです。  
また、いんこするまで、どうぞ、えいんこする。  
世界中で千ちゃん、千ちゃんを愛するボクより

「これは紛れもなく、親父の字です」

手紙を見せた清太郎さんは、二度、三度と深くうなずいてから、私の目を見て言った。私も、きつとそうだという強い確信を  
持っていた。清太郎さんのお父様は、今ならきつとこういう字を書くに違いない。

タマノリ人生とは、お父様がかつて自ら使っていた言葉である。地球をタマに見立て、自分はその上を自由に歩く人生だとの  
意味を込めて使っていたのだろう。⑧世界中を飛び回る忙しない自らの人生を、ユーモアに包んで小さな笑いに変えようとしたの  
かもしれない。

注文を書き記すために用意された素っ気ない裏紙は、手作りの台紙に貼り付けてある。文字の周りは押し花で飾り、表もすべ  
て押し花で埋め尽くした。その上から薄紙を重ね、ロウ引きしたのである。

お母様は、横浜の自宅でたくさんの花を育てていたそうだ。花を愛でるのが好きだったという。

そしてこれは、天国からの手紙。天国イコール美しいお花畑だなんて、単純すぎるだろうか。けれどもし、本当に清太郎さん  
のお父様が天国から手紙を送るとしたら、きつとこうするだろうと思ったのだ。

「親父の字だ」

しばらく無言で手紙を見つめた後、清太郎さんは再度そうつぶやいた。

「だけど、こんなにたくさん季節の花、どうやって集めたんですか？」

表の押し花にそっと手を触れながら、清太郎さんがたずねた。押し花は、いくえ幾重にも重ねるようにして貼り付けてある。中には、四つ葉のクローバーも紛れている。

「実は、それが一番苦労したかもしれません」

私は正直に告白した。

最初は、アンティークのポストカードに、近代美術館の喫茶室で書いた文面をコピーしようかと思っていた。けれど、そうするとボールペンの筆致は残せても、筆圧はなくなってしまう。臨場感が消えてしまうのだ。それで、やっぱり紙はそのまま現物を使うことにした。

「春とか夏なら、そこら中に花があつて、全く困らなかつたんですけどね」

（A）今、季節は冬の真つただ中だ。鎌倉にもほちほち梅が咲き始めてはいるけれど、梅の花だけでは味気ない。

「バラ、スマイレ、スイセン、アジサイ、あと、この赤くて小さい実はセンリョウですか？ 僕、あんまり植物に詳しくないんですけど」

大きな花の場合は花びらだけをピンセットで抜き取って、小さな花の場合は咲いている姿のまま、花や花びら以外にも、葉っぱや実などが入っている。

「この実は、（B）ハナミズキらしいです」

手紙の文面ができて数日後、花を探すために田楽辻子でんがくずしのみちを歩いていたら、課外授業中のハンティー（注1）に出くわしたのだ。手短かに探し物を伝えると、その日の放課後、児童たちと去年作ったという植物採集ノートを持って来てくれた。もう使わないし処分しようと思っていたものだから、どれでも好きに使っていいとのことだった。まさに、【⑨】とはあのような場面を言うのだろう。

「こうやって見ていると、宝石箱みたいですね」

清太郎さんが、少し照れながら言った。確かに、色とりどりの花びらが一面に散らばって、宝石のように見える。

「まだ、生きていますよ」

清太郎さんが、確認するように私の目を覗き込む。

「ええ、まだ生きています」

(C) 地面からは切り離されても、光合成をしなくても、この花たちはこの姿のまま今もちゃんと生きている。死ぬという事は、永遠に生きるということでもあるのかもしれない。私も、作業をしながらそのことをずっと考えていた。

⑪「親父と一緒になんです」

だいぶ間を置いてから、清太郎さんがぼつりとつぶやく。

天国からのラブレターを受け取った清太郎さんのお母様は、心から喜んでくれたそう。それからは、何かを悟ったのか、家に帰りたいと言わなくなった。ずっと、お守りのように手紙を胸元に抱きしめていたと聞き、ホッとした。

そして、そのまま静かに息を引き取った。安らかな最期だったという。

「あの手紙のおかげです」

初七日が済んだという報告をしに、わざわざ清太郎さんがツバキ文具店まで来てくれた。手紙を渡してから、まだ少ししか経っていない。もしかして、私が代書したことで、お母様の旅立ちを早めてしまったのではと心配になった。けれど、どうやらそうではないらしかった。

「お袋、安心したんだと思いますよ」

清太郎さんは、穏やかな表情を浮かべている。

「それまで、ずっと怒ったようなおつかない顔をしていました。でも、あの手紙を受け取った瞬間、久しぶりに笑ったんです。もう、それだけで僕も姉貴も……」

そこまで言うと、清太郎さんはポケットから慌ててハンカチを取り出した。私はそっと席を立ち、奥に下がってココアを淹れる。春が近いとはいえ、鎌倉はまだ底冷えのする寒さだ。

(小川 糸『ツバキ文具店』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) パンティー……鳩子の知り合いの女性教師。帆子という名前からついたあだ名。

問一 — 線①「お袋を、楽にしてあげてほしいんですよ」とありますが、清太郎さんは具体的に何をしてほしいのですか。「〜  
ということ」に続くように、二十五字以内で答えなさい。

問二 — 線②「物騒おそろなこと」とはどのようなことを意味していますか。五字以上十字以内で答えなさい。

問三 — 線③「にわか」の意味として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すぐに                    イ ひそかに                    ウ 急に                    エ 本当に

問四 — 線④「心から申し訳ない気持ちになるものだ」とありますが、ここから読み取れる鳩子の人柄として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア だれに対しても、私生活や気持ちにむやみに踏み込まず相手を尊重する誠実さを持っている。  
イ 書いた人に無断で、先に手紙を読むことに苦痛を感じるような傷つきやすい心を持っている。  
ウ 他人あての手紙を読むことへの好奇心を抑えきれない自分に対して、常に罪悪感を持っている。  
エ 完全に他人の気持ちを代弁できない自分を責めるほど、代書という仕事に強い責任感を持っている。

問五 — 線⑤「僕ぼくらの知ってる親父」とありますが、それはどのような人物ですか。その性質や人柄を表す言葉を二つ、本文中からそれぞれ五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 本文中の【⑥】にあてはまる最も適当な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不滅                    イ 秘密                    ウ 空想                    エ 理想

問七 — 線⑦「今度は私が目じりの涙を拭う番だった」とありますが、この時の鳩子の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 思いがけない清太郎さんの依頼に驚き、自分にできるのか不安な気持ちになっている。
- イ 亡き夫や息子から愛されていた清太郎さんの母親を、心底うらやましいと思っている。
- ウ 母を思う清太郎さんの心に打たれ、自分も精一杯期待に応えようと決心している。
- エ 清太郎さんが母親の言葉を真剣に受け止めてあげてよかったと、ほっとしている。

問八 — 線⑧「世界中を飛び回る忙しい自らの人生を、ユーモアに包んで小さな笑いに変えようとした」とありますが、このような父の性格をあらわしている部分を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問九 本文中の（ A ） （ C ） にあてはまる最も適当な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア いまだに                      イ たとえ                      ウ どうやら                      エ あいにく

問十 本文中の【 ⑨ 】にあてはまることわざを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 棚からぼたもち                      イ 濡れ手で粟                      ウ うそから出たまこと                      エ 渡りに船

問十一 — 線⑩「少し照れながら言った」とありますが、清太郎さんが「照れ」ている理由としてふさわしくないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 押し花の手紙を宝箱にたとえたものの、ありふれた下手なたとえだと気恥ずかしくなってしまうから。
- イ 天国からの手紙を書いてほしいとは頼んだが、予想以上に華やかな仕上がりでどきどきしてしまったから。
- ウ 手紙にちりばめられた押し花の明るさと亡き父に対するイメージが全くくいちがっており、とまどったから。
- エ 花々の目をみはる美しさは、父から母への愛情をそのまま表現しているようで、まぶしく感じられたから。

問十二 — 線⑪ 「親父と一緒になんです」とありますが、

(1) 「親父」は何と「一緒」だということですか。本文中から一語で抜き出して答えなさい。

(2) 「親父」はどのような点で (1) の答えと「一緒」なのですか。二十字以内で答えなさい。

## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 二〇世紀も終わりの頃になって、科学者たちは生態系の物質の動きにサケがどうかかわっているかということ調べ、思いがけないようなことを明らかにしました。

\* \* \*

「物質の流れ」という点からみると、サケは肉というタンパク質や骨というカルシウムなどがたくさんつまったカプセルと見ることができません。そのカプセルには海の物質がたくさん含まれています。研究者たちが調べたところ、一匹のサケになんとも一三〇グラムの窒素と二〇グラムのリンが含まれていたそうです。

引力の法則で水は上から下に、つまり川の上流から下流に流れます。そして海にたまり、海から蒸発した水蒸気が水滴となり、雨としてまた山に戻って川を流れ下ります。こうして地球上の水は循環します。a、たとえば塩分は水と違って空に上がることがないので、海にたまりつづけ、b、海は塩辛いのです。多くの物質はそうして海にたまります。

c、「海の物質のカプセル」であるサケは、引力の法則に逆らって川を遡ります。その結果、大量の海の物質が上流にもたらされます。研究者たちの試算によると、アラスカの川には、長さ二五〇メートルあたり、一ヶ月に八〇キログラムの窒素と一一キログラムのリンがサケによって供給されるそうです。

その結果、どういふことが起きるか。サケがのぼってくる川にはたくさんヒグマが集まってきました。ヒグマは越冬のために脂肪を蓄えないといけないので、秋にはものすごい食欲です。ある調査によれば一頭のヒグマは一シーズンに六〇〇匹以上のサケを食べるそうです。ヒグマは川から離れた森に行つてゆっくりサケを食べますが、たいていは半分くらい食べてまた川に戻つて次のサケを狙います。食べ残しはカラスやコヨーテなどほかの動物の餌になります。

クマに食べられずに産卵を終えたサケは死にますが、その死骸は鳥や魚やエビなどの餌になり、腐れば菌類や微生物を育てます。こうして川は豊富な海の窒素で満たされ、やがて孵つたサケの稚魚にとつても豊富な栄養となります。d サケの親は自分の体を提供することで、ほかの動物だけでなく、自分の子供の栄養にもなっているのです。

サケを食べたヒグマはもちろん森で糞をしますから、その時期の森の中はクマの糞だらけでとてもくさいといえます。その結

果、森林の木は育ちがよいそうです。サケののぼる川とのぼらない川で周囲の木の育ちを調べたら、サケののぼるほうが三倍も生長がよく、また、同じサケののぼる川でも川に近い木ほど生長がよかったという調査結果があります。それによると、木の中の窒素のうち実に四〇パーセントが海からもたらされたものだったそうです。

②「サケが森林を育てる」と言われても、聞いただけでは何のことかわかりませんが、自然のしくみを理解するうえでたいへん含蓄の深いことばです。森はたくさん命を育みますが、その森を豊かにするのがクマの糞で、そのクマの食料になるのがサケなのだということです。

\* \* \*

サケとクマと森林の研究をしているレイムチェン博士は、「私たちの研究で、それまで知られていなかった海と森のリンクが明らかになったが、それは森林生態系の理解にも重要である」と書いています。このことばからは、研究者として未知のこと、それも海と森という地球上の大きな生態系がつながっていたことを発見したことに對する誇らしさが伝わってきます。

サケは日本でたいせつな食料として利用されてきました。今ではサケといえば北海道というイメージがありますが、かつては九州までの広い範囲の川にすんでいました。また、北アメリカやヨーロッパにもいます。北アメリカではサケは重要な漁業資源であり、第二次世界大戦が終わった頃、漁業関係者から「たいせつなサケを食べてしまうから、ヒグマを駆除すべきだ」という意見がでたことがあります。漁業を単なる食料生産と考え、生産効率を下げるヒグマは殺してしまえという姿勢は、自然のしくみに對してまったく配慮の欠けるものです。実際にはヒグマは駆除されず、A 守られたのは幸運でした。

自然に向き合う姿勢について、私は以前からアイヌの物語などに関心を持っていました。童話や民話という形で表現されているので、はつきりとは書いてはありませんが、アイヌの人々が、動植物を自分たちと同じように見たり、自然に畏れや敬意、いたわりをもっていることが伝わってくるものが多いのです。

最近になって『アイヌ語の贈り物』という本が出ました。副題に「アイヌの自然観にふれる」とあったので、さっそく手に入れて読んでみました。この本は野上ふさ子さんという人が遺作として書かれたものだということを知りました。野上さんは学生時代にアイヌの人と生活をともにし、自分でもアイヌ語を習得してアイヌの物語などを記録しました。

この本の中で、私はアイヌの地名表現について書いた箇所に目がとまりました。アイヌの人々は生き物の命をたいせつにした

だけでなく、土地もまた生き物であると考えていた、ということが述べられています。たとえば川の本流と支流のことをそれぞれ「ポロ・ペツ（親の川）」と「ポン・ペツ（子供の川）」と言ったり、川にも年齢があるかのように「オンネ・ナイ（年とった沢）」、「ライ・ペツ（死んだ川）」と言ったりするそうです。

そうした表現の中には、私たちに奇妙に思えるものがあります。急流のことを「リコマン・ペツ（高いところに入っていく川）」と言うそうですし、水源のことを「ペツ・エトゥ（川に行く先）」、河口を「ペツ・プツ（川の入り口）」と言うのだそうです。川は上から下に降りるものですから、これでは逆に川が海から山にのぼって行くかのようです。けれども、このことは

B の側に立って考えれば納得できます。

私は思いました。最新の生態学によって解明されたことを、アイヌの人たちはるか昔から知っていたのではないだろうか。自然を理解するには、地形をたんなる無機物質の起伏と見るのではなく、命あるものとみなし、また、川を水が上から下に降りる管のように見るのではなく、親子のようにつながり、生まれては死んでいく生き物としてとらえる。そこは海からのぼってくるサケが生きる場所であり、サケは周りの生き物を生かし、森を豊かにする——そのことをアイヌの人たちはごく自然にわかっていたのではないかと思うのです。

\* \* \*

私たちはアイヌの社会、文化、歴史などをほとんど学ぶ機会を与えられていません。私も勉強ですが、はつきりしているのは明治政府が北海道を開発する過程でさまざまな形でアイヌの生活を奪ってきたということです。たくさん不正義と差別がありました。世界的にみれば、ヨーロッパ文明による、たとえばアメリカ、アフリカ、アジアへの侵入によるものと同じ図式です。そこにはつねに不正義と蔑視、それに基づく横暴と暴力がありました。

ここでは政治や戦争については触れないで、自然についての態度を考えたいと思います。ヨーロッパのキリスト教世界は人間を神の姿をした最高の被造物とし、地上の動植物を支配する責任があると考えました。そうした文化の中で、自然から人間に立つ物を見つけ出して利用することを「開発」と呼び、よいことだと考えました。高い山に登ることを「征服」と呼び、宇宙に行くことを「ミッション（使命）」と呼ぶことから、その精神が読み取れます。また、自分たちの文化を一番と考え、アジアやアフリカ、アメリカなどを低くみていました。地元の人たちになじみのある山や湖などを見つけると、「人類の発見」と言い、

勝手に名前をつけたことも、その表れでしょう。エベレスト山も、ビクトリア湖も、マッキンレー山もそうした名前の例です。

近代以降のヨーロッパの人々は、他文化の人々が持つ、自然に対する異なった考えを、あであるとして切り捨てました。たとえば、日食の原理を知らない社会の人々は世界の終わりが来たと恐れおののきました。ヨーロッパ人はそれを自然のいを理解しない愚かな態度だと断定しました。人類史の中でヨーロッパの文明と文化の果たしたうはきわめて大きなものがあり、私たちもそのえにあずかっています。その科学的な姿勢は高く評価されますが、一方で、自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢な面があると感じます。

二〇世紀の後半になって、人口が増え、環境問題が発生し、資源やエネルギーの枯渇が大きな問題となってきました。地球が有限であることに人類が初めて気づいたのです。人口が増え続け、物資やエネルギーを浪費し続ければ、限界があるということがまぎれない事実であることがわかりました。

そうした動きの中で、地球を我が物顔で支配するような態度はまちがっているのではないかということに気づいたのがレイチェル・カーソンでした。その叡智は世界を変えるほどの影響力を持っていました。もちろんカーソンが突然現れて、何もなしところからそういう認識に到達したわけではありません。多くの先人が研究して積み上げてきた学問や、思索によって深められた哲学を彼女が学んで到達したのです。

ところが、そうした欧米の文化の到達点とも言えるすばらしい自然観は、皮肉なことに欧米人に蔑視されてきた少数民族が当たり前にとっていたものでした。アイヌの人々にとって、世界は人間だけのためにはないというのは、当然すぎるほど当然のことでした。先にあげたカムイのことばの中に、欲張って山菜をとり尽くすことだけでなく、家に持ち帰って腐らせることを戒めることばがあります。これは食べられないほどの食料を買い、食べ物を大量に廃棄している私たちの生活への警告と読むことができます。食べ物はわかりやすい例ですが、もちろんそれだけではありません。熱帯林の樹木を大量に輸入していること、中近東から膨大な量の原油を輸入していることもまったく同じことです。

大和民族は欧米のようになることを「近代化」とする一方で、アイヌ文化を無視するどころか蔑視してきました。アイヌ文化を法的に認めたのはなんと明治維新から約一二〇年も経った一九九七年のことなのです。

それにしても、自分たちの国に古くから住む人たちに学んでいけば、日本列島の自然にこれほど迷惑をかけなくてもすんだと

思うと、複雑な気持ちになります。私たちはアイヌ文化に流れる自然観を謙虚に学ぶべきだと思います。<sup>⑥</sup>

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) アイヌ……………日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族。

(注2) レイチエル・カーソン……………アメリカの生物学者。第二次世界大戦後、アメリカは生産力を上げるために殺虫剤を大量に撒いて農業を行っていた。カーソンはこの行動が環境を破壊すると確信し、『沈黙の春』(鳥がいない春をたとえた題名)という本を出版して警鐘を鳴らした。そこには「私たちのすんでいる地球は自分たち人間のものではない」と書かれている。

(注3) 先にあげたカムイのことは……野上ふさこ著『アイヌの贈り物』には「この世界には人間ばかりが生きているのではありません」と書かれている。

問一 — 線① 「二〇世紀も終わりの頃になって、科学者たちは生態系の物質の動きにサケがどうかかわっているかということ調べ、思いがけないようなことを明らかにしました」とありますが、どのようなことを明らかにしたのですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一匹のサケに、一三〇グラムの窒素と二〇グラムのリンが含まれていること。
- イ 「海の物質のカプセル」であるサケが、引力の法則に逆らって川を遡ること。
- ウ 一頭のヒグマが、越冬のために一シーズンに六〇〇匹以上のサケを食べること。
- エ 木の中の窒素のうち四〇パーセントが、サケによって海からもたらされたものであったこと。

問二 [a] [d] に当てはまる語として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはなりません。

- ア さて                    イ つまり                    ウ そのため                    エ しかし

問三 — 線② 「『サケが森林を育てる』」とはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 [A] に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ヒグマの命も人々の食料も                    イ ヒグマも海の養分の循環じゆんかんも  
ウ ヒグマも漁業資源も                    エ ヒグマの食料も人間の食料も

問五 [B] に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア サケ                    イ ヒグマ                    ウ 川                    エ 森

問六 [あ] [え] に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 物語                    イ 役割                    ウ 迷信                    エ 順位                    オ 原理                    カ 恩恵おんけい

問七 — 線③ 「自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢ごうまんな面があると感じます」とありますが、自然に対する傲慢な姿勢とはどのような姿勢のことですか。三十字以内で説明しなさい。

問八 — 線④ 「我が物顔で」の言い換えとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 浮き足立って                    イ 手を振って                    ウ 羽うを伸ばして                    エ 指ゆびをくわえて

問九 — 線⑤ 「自分たちの国に古くから住む人たちに学んでいけば、日本列島の自然にこれほど迷惑めいわくをかけなくてもすんだ」について、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者はどのようなことを「自分たちの国に古くから住む人たち」から学ぶべきだったと考えていますか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

(2) 人間は(1)を学ばずに「日本列島の自然」にどのような「迷惑」をかけてきましたか。その一例を自分で考えて簡潔に答えなさい。

問十 — 線⑥ 「アイヌ文化に流れる自然観」とありますが、アイヌの人々は自然全体に対してどのような考えを持っていますか。それを説明した次の文の空欄くうらんに当てはまる言葉を本文から抜き出しぬきだして答えなさい。

自然を (1) 五字以内 とみなし、自然に対して (2) 十字以内 といった気持ちをもっていた。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- 1 モンコを開放する。
- 2 ギム教育を修了する。
- 3 アンガイ早く着く。
- 4 救急隊にシガンする。
- 5 ジョウセキ通りの手順で行う。
- 6 成績のジョレッツをつける。
- 7 使用をキョカする。
- 8 ソツチヨクな意見を言う。
- 9 ナゴやかに話す。
- 10 チンタイ住宅に住む。



